

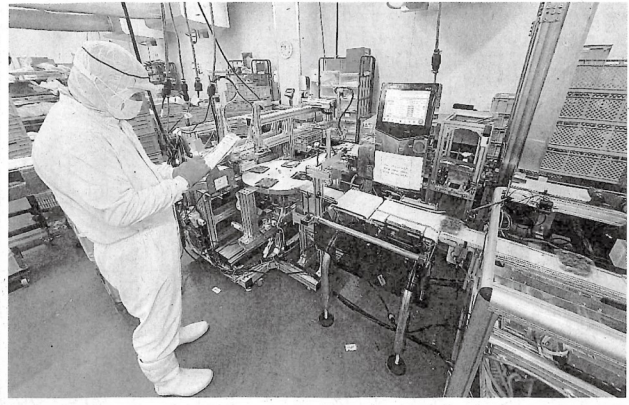


2024年(令和6年)
4月18日
木曜日
地域とともに
発行所
山陽新聞社
岡山市北区柳町2-1-1
読者センター
紙面へのご意見などは
086-803-8000
dokusha@sanyonews.jp

刻みネギ工程自動化

倉敷青果 生産能力2.2倍に

青果卸などの倉敷青果(倉敷市西中新田)は、本社敷地内のカット野菜工場に家庭向け刻みネギを生産する工程の一部を自動化し、生産能力を2.2倍に引き上げた。量販店からの需要増に対応する。自動化したのは、カットしたネギをパックに詰めて計量し、ラベルを貼るといった工程。機械システムを導入し、昨年12月に本格稼働させた。一連の工程



刻みネギの包装や計量などを自動化するシステムを導入した倉敷青果のカット野菜工場

は従来、従業員が手作業で行っていた。生産能力は月12万個から26万個にアップ。投資額は約2千万円で、一部に県の補助金を充てた。同社は共働き世帯の増加などによる需要拡大を受け、1998年にカット野菜事業に参入。刻みネギは、グループ会社の農業法人クラカアグリ(同所)が同市真備町地区などで栽培する青ネギを幅2ミリの小口切り

にし、「倉敷ねぎ」(1パック40g)として岡山県内外のスーパーやドラッグストアに出荷。カット野菜の中でもみそ汁やラーメンなど用途が広く、量販店向けの主力商品のひとつという。新型コロナウイルス禍で料機に家庭で料理する機会が増え、カット

野菜の需要はさらに伸びているとされる。富本尚作社長は「タイムパフォーマンス(時間対効果)を高めた消費者のニーズに応えるため、設備投資に踏み切った。生産性向上で利益率アップを図るとともに、自動化に伴う余剰人員を検査部門に振り向けて品質管理を徹底したい」と話す。(大河原三恵)